

「支店文化」からの脱皮



山口辰男

〈横浜市大経済研究所長〉

私が子供の頃、そして中学へ進もうとする頃、そう、大正の6、7年の頃だが、受験しようにも横浜には神中じんちゆう〈今の希望ヶ丘〉と二中〈今の翠嵐〉の二つだけしかなかった。もっとも実業学校としてはY校と神工〈神奈川工業〉の二つだけはあったが、兎も角にも合計四つしかなかった。これが開港後すでに60年を経て、人口も45万を擁した頃の横浜における文化的苗床の姿だ。女の子の学校はフェリスを初めとしてミッションの学校が多かったがくといっても4校程、県立では平沼が1校、市立では皆無という状態だったのだから恐れ入る。前期横浜の人々は金儲けに忙しくて教育くつまり文化を担っていく後継者の養成〉などのような迂回生産事業には価値を認めなかったらしい。この頃の神戸にはすでに神戸高商〈今の神戸大学経済学部〉が設けられていたのに比べれば、相当な後進都市だったといえようか。

横浜に高等教育の施設ができたのは第一次世界大戦後の大正9年だ。その頃から10年の間に現在の4大学の母体の専門学校ができたが、それで止ってしまっ一向に増さない。7大都市を含む県には例外なく都府県立の大学があるが神奈川県には一つもないくもっとも戦後になって実務教育を主とする短大は設けられたけれども〉という有様、どうも迂回生産は横浜や神奈川県のおはに合わな

いらしかったようだ。

たしか大正10年頃と記憶してるが、横浜公園の隅っこにはじめて市立の図書館ができたというので出かけてみた。小さなバラック建で、場末の本屋位の量の図書がおいてあった。3畳ぐらいの玄関に下駄く靴ではないが山をなしていたのが今でも眼に浮かぶ。

オデオン座という当時の日本で唯一の洋画専門の封切館があったが、ステージの前にボックスがあって、いつでもオーケストラくみたいなもの〉が演奏されていた。それが横浜における唯一の楽団で、私たちは映画かっとうしやしんをみるよりもそれを聞くのが楽しみで「名金」や「ジゴマ」をさしみのツマにしてみにでかけたものだった。その頃ハマには楽団演奏ができるようなホールは、今でも残る開港記念会館があるだけで、音楽会など開かれるのは稀だった。今日だってホールらしいホールは戦後派の県立音楽堂だけだ。だから相ついでくる海外からの芸術家たちはハマを素通りして西下してしまう。開港100年記念とかで文化体育館ができたが、体操場兼帯のホールでは頂きかねるといふ人も多い。どうもハマではホールとか講堂とかいうものは雨天体操場兼帯おくないというのが正統と思われてるらしい。学校というものはみんなそうなっている。今でこそ、小舟幸次郎さんの交響楽団あまちゆうあが一つできているが、その頃はハモニカ・バンドやマンドリン・クラブなどの趣味団体があった程度みみなしの音痴都市だった。小舟君がハモニカ・バンドを指揮してた姿を今でも思い出す。小舟君の努力が、花を咲かせ、実をつけるのに40年かかったのだ。当時のハマにはピアノらしいピアノが無かった。日本に2台といわれたベヒシュタインのフルコンサートグランドピアノが凡そ音楽とは畑ちがいの横浜高工〈今の国大工学部〉のバラック講堂にデンと据えられたのが大正14年だ。それでフランスの名ピアニストのジルマルシェックスをハ

マに呼ぶのに成功したという話が残っている。
震災後、公園の北隅^{よこはま}ッこにジメジメした感じの音楽堂がつくられたので喜んだが、軍楽隊の演奏位がマレにあったぐらいで、どうやら利用されだしたのは戦後、それもここ10年が程から夏のシーズンだけに開かれるプロムナードコンサートとは淋しい気がする。

洋式公園の第1号といわれる横浜公園の今日の姿などは昔を知る人にとっては「涙君こんにちわ」と唄いたくなるだろう。

お芝居小屋がハマから消えて45年にもなるだろうか。港座、^{つた}蔦座、羽衣座の大昔はさておき、賑座、横浜座、横浜劇場などには、死んだおふくろに時折り連れていかれたもんだ。

日本での近代新聞の第1号もハマで発刊されたが、地元新聞は「できてはつづれ、つづれてはでき」を繰返えすだけで、どうやら残ったのが横浜貿易新聞のアトである神奈川新聞だけは情けない。

地元新聞が育ちにくいような都市は人や事件の動きの少い都市にきまっている。新聞が育たないくらいだから本屋だって育たない。今日だって本屋らしいと言えるのは有隣堂ぐらいのもの。たしかに丸善が弁天通りにあるにはあったがそれは異人^{がいじん}たちや貿易商社たちの御用達しの性格のものであった。その丸善も戦後は市の中央から姿を消した。

人の動きが少なければ宿屋も育たない。^{いちげん}一見の客が泊って、永遠に泊らなくなる移民宿は相当あったが、みんな棄民宿となり、宿自体も棄てられてしまった。今日、学会など開くという宿がないので大困りをする。ホテルも、グランド・ホテル、オリエンタルホテルの昔からいっこうに育たず、戦後派としてシルクとプリンスが出来たくらい。全国のホテルブームの波もハマには押寄せなかった。

明治前期の文明開化の空気を吸って成長した青年たちから横浜文壇史ははじまった。そして、岸田吟香とか、^{れんじょう}下岡蓮丈、^{かながきろぶん}仮名垣魯文といった先覚者はさておくとして、岡村覚三、北村透谷、フェリス出身の若松^{しづこ}賤子の時代、小島雨水、山崎紫紅などの時代から、谷崎潤一郎、有島武郎、里見弴などの横浜描写の濃い文学、長谷川伸や吉川英治の登場、大仏次郎、獅子文六などハマ生れ作家の時代、昭和に入って村松梢風、北林^{とうま}透馬、佐藤惣之助、中里恒子などと有名な人たちをリストアップできるが、何れも横浜で育て上げたという人々ではなく、ハマを舞台として物をかき、たとえハマ生れでも、そこで名を成したということでもなく、ハマの文学成長とか文壇とかに特別な貢献をしたわけではない。みんな東京へでていった人たちだ。

開港以来、近代産業のモデルプラントが横浜に開花はしたが、どれもこれもハマでは育たず東京へ行ってしまった。気がついた時は生糸が青息吐息、貿易商品を失ないかけていた。そこでやっと京浜工業地帯が出来たようになったのが第一次戦後、本格的になったのは昭和に入ってからだ。産業界は横浜に支店か出張所を残して本店は東京に行ってしまった。この傾向は今日でも続いて横浜の支店経済化が問題になっている。

私はこの文で、何もハマ文化の懐古をやっているのではない。ハマが文化的側面において育つ土壌を持っていたのだということを示したいだけだ。ハマは文化不毛の地だという人もいるけれど、不毛の地ではなくて不毛にさせたものがあつたということ^ををいったのだ。土壌がないのではなくて、その土壌に播かれた種を、出てきた芽生えを肥培管理することを半世紀から一世紀近くもかえりみなかったあと結果がこうなったのだということ^ををいっているのである。

ハマの一世たちはいわゆる一旗挙げるのを目論ん

でやってきた人たちだ。だから勤勉に金儲け商売には熱心だったが、二世たちは蓄積された富を生産施設にも文化施設にも注いでいくのを忘れたようだ。もっとも三溪園というのもあるがいわば借り物の文化的遺産といえようか、近い目先には強かったが遠い目先は弱かったが為に折角播かれた経済の種も文化の種も芽を出し、ひと花咲いただけで三代目には枯れてしまったのだといえよう。経済の面でも、近代資本主義行きバスに乗りおくれたばかりに支店経済に成下がってしまったのと同じく、文化の面でも支店文化になってしまったのだ。

種がよく、土壌はよくても、肥培管理が適切でなければ育たない。ハマは東京が近いということから東京にオンブばかりして肥培管理を忘れたのだ。「東京が近いから」というのが、横浜が伸びないのだとする相言葉だった。確かに昔は近かった。昔の時刻表をみると、あのポッポのマッチ箱列車が横浜<桜木町>新橋間を急行で45分で走ったのだから。だというのに、百年近くなった今日でも、桜木町から京浜東北線のポンコツ電車は、同じ時間で大衆を新橋まで「どうやら息の通う状態」にして運んでくれる。百年前と同じなら、ちっとも進んでいないということだ。だから、昔の方が近くて、今日の東京は地理的の28.8キロは変らなくても遠いということになるのだ。にもかかわらず今でも「何しろ東京が近いので…」をハマ不振の理由にするのはおかしい。東京が近かろうとそうでなかろうと、文化を担う人々が少なければどうにもならない。その担い手を育てて来なかったことがハマの弱点だったといえよう。今日「ハマは文化不毛の地」というが、不毛の地という前に何故不毛になったかを知るべきだろうし、土壌が悪くなければ、肥培管理をどうすべきかを考えるというのが順序ではないだろうか。ハマの文化土壌は悪くはないと私は思っている。

問題は肥培管理の方法にあることはたしかである市長さんのいう「文化管理都市」という言葉の中の管理という語の意味が、肥培管理であるならうれしいと思う。